第１期タイ王国留学生の世界史補習をふりかえって

―― 学習支援の記録と考察、評価 ――

石　出　みどり
お茶の水女子大学人間文化研究科比較社会文化学専攻２年　佐々井　真　知
お茶の水女子大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース３年　鯨　井　彩　子

Ⅰ章　はじめに

本稿は2005年４月に入学したタイ王国の留学生２名が、本年２学年で受講した必修世界史Ａの学習を支援する補習の記録と報告、および評価と考察である。

１．タイ王国留学生受け入れの始まり

2004年６月、お茶の水女子大学（本田和子学長）は東京のタイ王国大使館（H.E. Piromya大使）と、お茶の水女子大学附属高等学校におけるタイ王国が派遣する学生の受け入れを促進するため、教育協力に関する覚書を締結した。

覚書には大学は文部科学省の要請により、大使館が推薦する学生を毎年２名以内附属高等学校に受け入れ、附属高校は定員外[1)]として学生に３年間の後期中等教育を行う、大使館は大学の規定に従って学生の教育に要する費用を大学に支払う、大使館は学生の世話にあたる大使館員を定め、大使館員と附属高等学校は学生の健康な成長を図るために日常的に協力すること、などが記されている。

最初の入学生[2)]であるＹ（1988年１月生まれ、バンコク出身）とＶ（1988年９月生まれ、バンコク出身）は自国の選考をへて2003年10月来日し、東京ではそれぞれ別の寮で一人暮らしをしている。タイで約３ヶ月、来日後はアジア文化会館で日本語を学び、2004年12月に日本語能力検定試験１級に合格した。その間2005年４月の入学前に本校で数学、化学、地学、日本史の補習を受け、高校入学の準備を行った。１年次も２年次もふたりは別のクラスに所属し、熱心に学習する傍ら部活動や委員会活動に参加し、一般生徒と変わりない学校生活を過ごしている。

２．補習の開始

2005年４月、ＹとＶが２年生に進級し、必修世界史Ａの授業が始まった[3)]が、ふたりとは日本語の会話で意思の疎通ができたため、補習の用意は当初考えていなかった。しかしＶが授業に積極的な関心を持ち、授業後も熱心に度々質問に残ることから、１年次に他の科目でしてきたような補習を望むかどう

か尋ねたところ、強く希望した。Ｙもまた補習を希望したので、５月高校内の留学生・外国人生徒受入実務委員会と連絡をとり、補習の準備を進めた。

補習担当者は教職課程をとっている歴史学専攻の学生、できれば大学院生をという条件のもとに、前校長で人間社会科学科の鷹野光行教授を介し、大学院の人間文化研究科比較社会文化学専攻２年の佐々井真知さんと、文教育学部人文科学科比較歴史学コース３年の鯨井彩子さんを紹介していただいた[4)]。週１回の補習の日時は当事者間の調整で、Ｙ、Ｖの部活動がない水曜日の放課後３時半から約２時間と決まった。

補習の目的は、日本語能力の不足や日本での社会体験の欠如、また日本の小中学校の社会科教育、歴史教育を受けていないために起きると考えられる通常の授業の理解不足を補うこと、言い換えれば標準的な日本人生徒程度の理解と学習の成果を挙げるための学習支援である。しかし結果はこの目的を大きく上回ることとなった。

以下Ⅱ章において補習担当者より補習の内容、方法等についての報告と考察、Ⅲ章において授業者より補習の評価を行う。(石出みどり)

Ⅱ章　補習の内容と方法

補習の内容は毎時の授業のための通常の補習と、試験・課題対策のふたつに大別される。

1．通常の補習について

通常の補習は、Ｖ、Ｙが授業で聞き取れなかった部分や理解できなかった部分を補うことを目的として行われた。また、留学生に対する補習であることから、日本語の聞き取りや書き取りの支援に加え、日本人の高校生にとっては既習事項の日本の歴史や地理に関する基礎知識の不足に対応することにも留意した。

これらの目的を達成するために、授業で使っているプリントや資料集、私たちが持参する用語集や問題集を用いて、用語確認、内容の解説、質疑応答、問題を解きながらの復習という方法で補習を行った。以下補習の進め方、授業内容の変化による補習の対応の仕方、実際の補習を通じて気づいた点、反省点の順で記していくこととする。また、通常の補習として１回だが日本史の補習を行ったので、それについても最後に記した。なお、カッコ内の数字は本章末に示した補習記録の回に対応している。

(1)　補習の進め方

毎回はじめに、今日の補習はどのように行いたいかをＶ、Ｙに聞き、その日の進め方を決めた。多くの場合は、授業で使ったプリント（ノート代わりのもの）の順序にそっての解説をしてほしいとのことで、資料のプリントや資料集などを参考にしながら、いわば再度授業を行う形をとった。ふたりから質問の出る箇所は、より詳しく説明した。また授業内容をほぼ理解している場合は、わからない部分だけの説明にとどめた。その場合は順序にそった復習を省略し、質問の挙がった事項を中心に補習を進めた。さらに、練習問題を解きながら理解の程度を確認をすることもあった。

(2)　授業内容の変化による補習の対応

１学期の前半まで授業は石出先生のオリジナルテーマの授業であり、補習で教科書や問題集を直接の教材として用いることはできなかった（1～3)。そこで授業内容を把握するために、私たちも授業に参加し見学した。また、この時期の授業は限定された地域のできごとを年代順に追っていく形ではなく、多くの資料を整理し、そこから適切な情報を手に入れて自分なりに考察する力が求められるものであった。そのため特に沖縄戦など日本に関する単元では、留学生は日本の歴史や地理に関する基本的な知識が不十分であるため、授業を時間内にその場で理解することは難しかったようだ。補習では基本的な用語の確認や、地図を見ながら地名を確認することも多かった。

その後は教科書にある単元の学習となったので、基本的には授業時のプリント、教科書、資料集、問題集を利用しての補習となった（7～30、ただし試験や課題対策は除く)。

(3)　**実際の補習から**

補習をしていく上で、様々なことに気づかされた。留学生からの質問、補習時に利用した教材、問題集の活用の三点に分けて述べていきたい。

まず、留学生から受けた質問についてである。補習期間を通じて多かった質問は、体制や思想などを示す用語の意味である。特に、社会主義、資本主義、民主主義、帝国主義、自由主義、共和制、絶対王政などの用語は度々授業で扱われたため、何度か質問を受けた。抽象的な用語である上に、それらの用語が登場する文脈が常に同じというわけではないため、説明においてもそれを留意しなければならない。これらの言葉については、用語集や教科書の説明も抽象的なものが多く、説明文中の言葉そのものを解説することに加え、それぞれの時代背景を踏まえた説明を行い、具体例もその時代・地域から引き出す必要がある。

加えて歴史用語以外の言葉についても、しばしば説明した。特に「金ぴかの時代」のような比喩的な表現を含む言葉、「一枚岩ではない」のような慣用的な表現がわかりにくいようだった（13）。また試験の復習をした際には、問題文中の「寛容」、「画期」といった言葉の意味がわからないと質問を受けた（16）。

さらに抽象的な歴史用語や比喩的な言葉や熟語の意味だけでなく、当時の人々の理想と現実、政党の掲げる主張と実際の行動との違いなど、両面で捉えなければならないものの理解も難しいようだった。「ヒトラーは労働者の支持を得て独裁体制の基礎を築いたが、労働者を主な支持基盤とする社会主義者を弾圧したのはなぜか」、といった質問がその一例である（27）。さらに、頻繁に各国間の関係が変化する近現代史では、同盟関係にある国々、敵対関係にある国々の認識がときどき混乱してしまうようであり、そのことに由来する質問もあがった。それぞれの国がその時どのような立場をとっているかを常に意識させつつ進めることが重要である。また、辛亥革命から日中戦争に至るまでの国民党と共産党の対立と協調が繰り返される分野では、数十年の間に事件がいくつも起こるので、因果関係を把握させながら説明し、理解させることに特に留意した（29、30）。

しかしながら補習の回が進むにつれ、単に用語の質問だけではなく、できごとの因果関係に関する質問やグラフや表を適切に読み取った上での質問なども挙がり、理解が深まっていることを実感した。例えばソ連のスターリン時代の工業化についてのグラフを見て、「コルホーズ化が進んだにもかかわらず、なぜ工業化が進むのか」という疑問を持ったようだ（21）。さらに、「現在共産主義の国はあるのか」、「中国とソ連の社会主義は違うのか」といったような授業の内容から発展した質問や、自分の中での理解を確認するような、「○○とは△△のことですか」、という質問も度々聞かれ、授業や補習の内容を受身ではなく積極的に取り入れていることがわかった。また留学生がふたりだったため、留学生同士でタイ語で説明し合っていることもあった。自分が理解できた部分をお互いに教え合うことで、さらに理解が深まったのではないだろうか。回を重ねるごとに自分で地図や資料を見て、わからない用語や地名を調べることが多くなっていったことも特筆すべき点だろう。

次に、補習の際の教材についてである。前述のように、授業時のプリント、留学生持参の資料集、私

たちが持参した用語集や参考書などを用いて補習を行ったが、それらに記載されている地図、図、チャート、写真などを併用することが必要不可欠であった。特に地図は、日本地理や世界地理についての基礎知識が少ないようだったので、できるだけ多く利用し、地名を文字としてだけではなく、地図の中で理解できるように留意した。

基本的には資料集などに掲載されている該当地域・時代の地図を利用したが、分野によっては広い範囲を示した地図を参照することも必要だと感じた。例えば、アメリカの南北戦争における南部・北部とは、アメリカ合衆国内での南部・北部であり、南アメリカ大陸・北アメリカ大陸ではないことなどは、南北アメリカ大陸の地図を広げての説明が不可欠であった（8）。また、特に欧米列強による植民地獲得競争や第一次・第二次世界大戦の時期の学習では、扱う地域が世界全体にわたるため、時には現代の世界地図も利用して地域を確認しながら進めた。エチオピアがアフリカの一国であることや、アルバニアが東欧のバルカン半島にあることなども、地図で確認する必要があった。辛亥革命から日中戦争開戦までを扱ったときは、中国史の予備知識がないこともあり、清の領土や列強各国の支配地域などを地図上で示しながら説明していった。V、Yも地図の上で北伐や長征の経過、日本軍の進路などを追っており、視覚に訴えて理解することができたようである（29）。

地図以外にも、図、チャート、写真などは、学習内容が簡潔に記されていたり、具体的な状況を知ることができるため、積極的に利用した。ふたりにとって特に写真は興味深かったようで、それによって疑問が解けたり、また一方で更なる疑問が生まれ活発な議論が行われたこともあった。例えば資料集の第一次世界大戦の塹壕戦の写真から、「どうやって戦ったのか」、「どのように造ったのか」などの具体的な疑問が出され、そこから毒ガスや戦車の使用など新兵器の出現に話が広がった。また「銃後の生活」というテーマで掲載された多数の写真を見て、銃後の女性の活動への関心を持ち、そこから女性の参政権獲得につながる話へ展開した（18）。

第三に、問題集を使っての補習の際に気づいたことを記しておく。問題集を用いたのは試験対策のためが多かったが、それについては次節で扱うため、ここでは通常の補習の場合について述べる。問題集の活用は、「授業のプリントを勉強しても試験問題の形で問われると解けなくなってしまう」、また「授業内容の理解度を確認したい」、というふたりからの相談と要望からはじまった。補習とは別の日、あるいは補習当日に数回、社会科準備室の問題集から問題を選択し、コピーした（＊印）。通常の補習においては、流れ図や要点を絞った文章の空欄に語句を補充する問題、また選択問題など、比較的簡単なものを主に利用した。宿題として該当箇所の問題を解いてくるよう指示し、次回解説をしながら答えあわせをした（12、13、19、20）。V、Yともに、どの分野でも用語問題はほぼ正解していたが、四択の正誤問題を難しいと感じたようである。しかしどこが正しいのか、どこが誤っているのかを、時にはプリントや資料集に戻って確認しながら答え合わせをしていくことによって、授業の理解を深めることができたのではないだろうか。

さらに、1月のセンター試験直後の補習では、その試験問題に挑戦した（26）。V、Yは授業で習った

部分（アメリカ独立戦争、社会主義など）の問題は、学習から時間があいたにもかかわらず正解しており、一度学んだことがしっかりと身に付いているようだった。

以上、３点に分けて通常の補習を通しての発見、感想を述べた。全体を振り返ってみると、私たちが一方的に教えるというよりも、留学生ふたりからの積極的な質問や要望によって双方向の補習となったと言える。

(4) 反省点

約１年間、試行錯誤を繰り返しつつ補習を担当してきたが、ある程度の成果があったと思われる一方で、反省すべきことも多い。(3)と対応する３点と、現代史の知識に関しての反省点を加えて４点を、以下に記していく。

まず、留学生からの質問に対する答え方、説明の仕方には改善すべき点が多くある。質問でしばしばあがった体制や思想などについての用語は、それぞれを比較したり具体例をあげたりして、わかりやすくまとめたプリントを作成することが必要だったのではないか。その時々で説明を繰り返しても、抽象的な言葉ゆえにその場で理解することは難しいと考えられるので、文字や図、表として形の残るものを渡して復習できるようにすればよかったかもしれない。

抽象的な用語以外にも、歴史用語の理解を助けるために、市販の用語集や参考書から、授業で扱っている分野をコピーして配布するなどの方法をとることが有効だろう。また質問に答える際は、質問を歴史の流れの中で捉えなおせるような答え方をすべきである。わからない点の前後の状況や背景を踏まえて、それにつながるような説明が求められていたと思う。また補習時にはできるだけ多様な資料集や地図帳などを持参し、その場で質問に答えられるようにした方がよいのではないか。その場では答えられない質問を受け、調べて次回に答える、ということが何回かあったが、そうするとＶ、Ｙは質問の内容を忘れてしまっていたり、前後の説明が再び必要になったりした（21など)。質問が出ることは非常に望ましいことなので、それを生かすためにも、できるだけ早くの回答が求められるだろう。

第二は、補習時の教材についてであるが、問題集や参考書以外にも、例えば小説や映画などを紹介するとよいのではないか。今年度は留学生の方から、「この分野に関する小説や映画があれば教えてほしい」との要望があり、いくつか紹介したが、できればリストアップするなどして補習担当者から積極的にそれらを勧めるといいだろう。日本語の能力にもよるかもしれないが、小説や映画は時代背景やできごとの詳細の理解を助けるため、利用の仕方次第でかなり有効である。しかしながら、内容の吟味が必要であり、特にフィクションかノンフィクションかなど、紹介する際に留意すべき点も多い。

そして第三に問題集の利用についての反省である。問題集は試験対策としてだけでなく、通常の補習においてもより多く用いてもよかったのではないか。特に文章の穴埋め問題、流れ図を完成させる問題などは、試験前よりも通常の補習において、授業の復習としての活用に適していたように思う。もちろん、授業のプリントを用いての補習が優先であるし、留学生からの質問に答えることも重要であるが、

時間がある場合はプリント以外を使って説明することも理解を深める上で有意義に違いない。あるいは宿題にして、授業や補習で扱った範囲の知識の確認をすることもよいかもしれない。

最後に、現代史の知識を補足する機会を持つ必要があったのではないか。日本での生活が他の生徒に比べて短いことから、日本の最近のできごとについては詳しくなく、また国際情勢についてもテレビニュースや新聞にふれる機会が少ないためか、あまり知らないようであった。そのため歴史的なできごとを説明する際に、現代の制度や事件などを引き合いに出しても理解しづらかったと思われる。例えば第一次世界大戦中のイギリスの三枚舌外交について、現代のパレスチナ問題と絡めて説明しようとしたが、うまく伝わらなかったようだ (18)。過去のできごとを学習する場合でも、中には現代まで続く問題もあるため、その週の目立った国際情勢の動きを簡単に伝えるような時間を作ってはどうだろうか。

大きな反省点としては、以上の４点である。これらの反省を活かし、さらに充実した補習ができればと思う。

(5)　日本史の補習について

通常の補習は世界史のみで、日本史については試験対策が中心であったが、１回だけ留学生からの質問に応え、日本史の授業の補足も行った (6)。日本史は世界史に比べて人物名に漢字が多いことと、比較的詳細な部分まで勉強する必要があることから、留学生ふたりにとっては難しく感じることが多いようである。補習でも主に漢字の読み方についての質問を受けたり、用語の解説を求められたりした。このような日本史の補習に関して反省すべき点は、Ｖ、Ｙは現代の日本の政治制度などについての基本的な知識が他の生徒に比べると不十分であるにもかかわらず、過去の制度の説明として現代との比較を持ち出してしまったことである。余計に混乱させてしまったかもしれず、あらかじめ彼女たちの持つ基礎知識の範囲を確認しておく必要があった。

また、２学期後半から３学期は、日本史で学習した分野を世界史で扱うことも多く、日本史の知識を世界史の学習においても生かすことができていたようである。日本史の授業で既習の部分について私たちが確認のための説明を求めることもあったが、ほぼ正しく理解して答えることができていた。

２．試験・課題対策について

この補習の目的のひとつとして、留学生ひとりでは対応が難しい試験や課題に関しての支援があった。試験対策では問題を解く際のテクニック的な部分だけでなく、試験勉強の方法やできごとの流れを理解できるようにすることを、課題対策では小論文やレポートのテーマの相談、参考文献の探し方から書き方の支援、添削まで、その都度留学生のペースに合わせて行うことを意識して実行した。

以下試験対策と課題対策に分けて、それぞれで行った補習内容について、留意点や反省点を交え詳しく述べていきたい。

(1) 試験対策

補習の対象となった試験の種類には、定期試験（小論文形式を含む）と留学生の大学受験に必要な日本留学試験[5]とがある。高校の定期試験には、授業内容に関する問題の記述解答式の試験と、授業内容を各自が発展させて考察する小論文があるが、後者のための補習については後述の小論文・レポート対策の中で詳しく扱いたい。また日本史については、定期試験対策は世界史と同様に行ったので、世界史と日本史を区別せずに述べたい。さらに日本留学試験への対策で行った政治経済分野の補習についても、同様に記したい。

以下、高校で実施される定期試験の中で問題集を使った試験対策、問題集以外での定期試験対策、留学生試験対策について、それぞれの内容を具体的に記す。

まず、高校の定期試験に対する対策であるが、ここでは主に問題集を使用した（14、15、22～24、31、32）。問題集を使い始めた経緯は既に述べたとおりである（Ⅱ章１(3)参照）。試験問題というものに実践的に慣れるというためだけでなく、内容がよくまとまった良問を使うことでより理解が図られればと考え、定期試験対策としても使用することにした。その際、主に問題の選び方と使い方に留意した。社会科準備室には様々な種類の問題集があるが、使用する問題はできるだけ複数冊から、異なる難易度・パターンのものを選ぶよう心がけた。以下はその具体的な例である。

当初、Ｖ、Ｙは空欄補充タイプの問題が苦手で、問題文の空欄にあてはまる語句は人名なのか、国名・地名なのか、体制なのかなど、「どのような種類のことばが入るのか」を読み取ることが難しいと言っていた。そのためまず空欄補充問題を意識的に選択した（14）。そして難易度の低い問題を手始めに、解く時には空欄に何が入るかを確認しながら文章を声に出して読んでいくという方法をとった。このやり方は時間はかかるが、文章を読むことで内容の確認がスムーズにできる点、漢字の読み方・語句の意味の確認にもなるという点で、効果的であったように思う。回数を重ねることで、また留学生自身の語学力向上によって、当初苦手とした空欄補充に関する困難は次第に解消されていったと思える。

そして問題を解く中で、用語の意味内容についてよりも、「どうしてこういう結果になったのか」という因果関係を尋ねられることが多くなった。例えば「無政府主義者による摂政宮暗殺未遂事件が、なぜ社会主義者弾圧につながったのか」、「なぜ西園寺公望が政党政治派なのか」など、内容を理解した上での質問がみられた（15）。２学期中間試験終了の翌日には、世界史・日本史の試験問題について質疑応答や解説をしたが、その際試験の感想として、世界史も日本史も「単なる暗記で解ける問題ではなく、自ら考えて書く記述式の問題が多いので難しく、解答時間も足りない」と言っていた（16）。このことから、できごとの原因や結果、影響などを文章で書けるように練習する必要性を感じた。それ以降も「文章で答える問題が難しい」との意見が度々出されたので、練習問題を選ぶ際に文章で答える問題を少しずつ入れていくようにした。しかしその後いざ練習問題を行う時になると、授業の内容をまだ完全には覚えていないためか、「文章題よりも内容を再確認しやすい流れ図の問題や、用語問題をやりたい」という要望が強く、文章題を実際に行うことはほとんどできなかった（23以降）。

２学期に入ると、用語で答える問題を一緒に解いていく形が最も多くなった（23、30～32)。このころになると、問題文が長いものでも文章を読むことに支障はなくなってきており、文章を読んで理解するスピードは日本人の生徒とほとんど変わらなくなっているように感じた。その意味でもやはり補習時間の最後などに、何らかの形で、少しずつでも「自分で言葉にして説明する」練習をすれば、より効果的だったのではないか。この点は補習を通しての大きな反省点である。

次に問題集以外での対応をした試験対策としては、２学期期末試験で出題が予告され、準備が必要であった「重大（十大）ニュース」のための補習がある（22)。これは、その年の国内外の重要なニュースから10件選び、短くまとめる課題である。しかしＶ、Ｙともに日頃から新聞を読むことがなく、ニュースはインターネットによることがほとんどであるということで、国内情勢や国際情勢についてほとんど知らない状況であった。石出先生に出題の意図を確認すると、単に10件のニュースを挙げることではなく、重要なできごとを「自分で調べる」ことの方が目的とのことだった。そこで大学附属図書館で調べる機会を持とうとしたが、当人たちは他の科目の試験準備も迫って時間がなく、大学附属図書館の中の新聞がある場所と、定期購入している雑誌『新聞ダイジェスト』の紹介をするなど、資料の探し方をアドバイスするにとどまった。しかし本来ならば、日頃から現代のニュースを意識的に話すようにするなど、長期的なスパンで取り組むことができたらよかったと思う。

第三に、来年度６月に実施される日本留学試験の「総合科目」に向けた試験対策があった(26、33～36)。「総合科目」は政治・経済・現代社会・地理・近代の歴史の融合問題で、文系の留学生に必要な科目である。理系志望のＹは受験しないため、文系志望のＶに対してのみ補習を行った。

この科目の内容は地理歴史科と公民科だが、高校の授業で未習の部分を中心に扱うことにした。Ｖの所有している日本留学試験の対策本のテキストにそって内容を説明した。その際まずは大体の流れをつかめるよう、資料集などの図や分かりやすい表などを見せながら話をすることを心がけた。この補習では世界史の範囲は近現代のみであり、未習部分はそれほど多くなかったので、Ｖの要望に応え政治経済に関しても補習をした（33～36)。政治経済分野では、日本の国会の仕組みや憲法に関する内容は避けられず、Ｖにとっては全く知らないような状態からのスタートにならざるを得ない。また、たとえば地方自治の分野で出てきた東京都の23区の「区」（特別区）と横浜市の緑区の「区」が同じではないことを、私たちはその違いを生活感覚としてすでに持っているが、Ｖは理解していないようである（34)。その意味でも、一つ一つの語句の意味を確認しつつ、何よりもまず理解するまで内容を説明することを徹底し、その後、日本留学試験用の問題集の問題を解き、過去問を解くという流れで補習を行った。

(2)　小論文・レポート対策

高校では、一年を通して定期試験として、また課題として、度々小論文やレポートが課せられていた。この補習でもそのうちの４回に関わった（3～6、9、10、26、28)。それぞれの課題によって求められる内容は異なったため、自然と対応の仕方は異なった。以下に個々の課題に対する具体的な支援の流れを

示す。

第一に、１学期の期末試験での小論文対策がある（3～6)。ＶとＹにとっては初めての小論文であったので、１ヶ月ほど前から準備を始めることにした。具体的にはまずテーマを決め、資料を一緒に探すことから支援を始めた（3)。ＶもＹも最初は不安であったようで、小論文指導の前から、授業を出発点にテーマをある程度決めてきていたので、私たちもＶやＹの持っている興味、関心を大事にすることを意識した。ふたりとも母国タイとの比較をしてみたいとの希望があったので、タイに関する文献も含めて、大学附属図書館へ行って関連する文献のインターネットでの探し方を説明し、その後実際に探し、それぞれ２冊ほど本を借りた。

次の補習ではほぼ決まったテーマについて論点をもう一度整理し、基本的な知識を確認した（4)。その際、特にＹは日本との比較で書いていたので、「日本人としてどう思うか」をよく尋ねられた。戦前の日本の客観的な状況について説明はできても、「実際の愛国心はどうだったのか」、「今の日本人の愛国心はどうか」と問われると、自分たちはこう考えるとしか言えず、そのはっきりとしない返答にしばしば物足りなさを感じさせてしまったようだ。補習における難しさのひとつである。

その後前回の論点整理からさらに構成の組み立て方の大枠を再確認し、それに伴う考察を一緒に話す中で考えた（5)。前回同様日本人としての意見を何度も質問されたが、私たちとしては、私たちの考えることに縛られずに、逆に言えばタイ人ならではの視点をもっと生かして書く方が良いのではないかと考え、できるだけ自分はどう考えるのかと問いかけて、考察するように促した。

最終的にはそれまでの補習での考察などをもとに、ＶとＹがそれぞれ書いてきた文章の語彙や文法の間違いなど表現を中心に直した（6)。初めての小論文ということで、全４回とある程度時間をかけたので、Ｖ、Ｙどちらも日本語の文献を２冊以上利用することができた。中立的な立場をとるためにも、小論文などの場合には時間をかけられるように計画をしていく必要性を感じた。

第二に、夏休みの課題の小論文対策があった（9、10)。Ｖ、Ｙともにタイに帰国するため、全２回の補習しかできなかった。夏休み前の補習時にこの課題についての相談を受け、テーマを何にするかを相談した（9)。Ｙは、テレビのニュース（サッカーのワールドカップ以降のドイツにおける国旗認識の変化について）を見て国旗に興味を持っており、授業以外で生じた興味を授業に関連させ、課題に生かそうとしていた。一方Ｖはもともと持っていたナチ支配下のユダヤ人やナチズムへの興味を反映して、大まかにテーマを決めた。この後次回の補習までに期間が空いてしまうので、各自進めるということにした。この間、ふたりの選んだテーマが授業の内容と離れ、ともにドイツに関することであったので、私たちの所属するお茶の水女子大学の山本秀行教授に参考文献について尋ねるなど、小論文指導に関しての協力を仰いだ。

そして夏休み中の補習において、書いてきたレポートを見る予定であったが、ふたりの進行の速度が異なっており、Ｖはタイ帰国中にタイ語の文献を読んでテーマは決まっていたが、未だ文章になっていない状況、Ｙはテーマもまだはっきりしていないという状況であった（10)。そのためＶとはテーマの内

容について話し合い、Ｙとは興味を持っていることを聞きながらテーマを検討し、図書館に行って資料を一緒に探した。

時間の関係でＶ、Ｙともに、それ以上時間をとって内容を検討することはできなかったが、小論文も２回目ということで、それぞれに任せることにした。ただ、Ｖは書いた論文を提出前に添削してほしいということだったので、メールを使用し、文法や誤字脱字などを簡単に直した。長期休暇中や日程の都合の合わないときに、メールを使うことも考慮に入れておくとよいかもしれない。

またこのレポート指導で、「帰省中に母語のタイ語で参考となる文献を読んだほうがよいのではないか」と私たちが提案したところ、ふたりにとっては「タイ語のものよりも日本語の文献を用いたほうが翻訳の手間がないためやりやすい」、とのことであった。確かに歴史用語などは翻訳すると一般的ではない単語になる場合もあり、不自然かつ不正確になるかもしれない。もちろん日本語の文献を読みこなすには相応の日本語の能力が必要であり、ふたりはそれだけの能力をもっていたので問題はなかったが、今後日本語以外の文献を用いて日本語で論文を書く生徒もいるかもしれない。その場合には、文法だけでなく、日本語の適切な表現についても気を配る必要があると感じた。

第三は、書くことに対する支援ではなく、私たちの助言なしに取り組んだ小論文に対する対応であった（26）。冬休みの課題として提出したＹの小論文が、選ばれて自治会誌に掲載されるということで手直しを手伝った。具体的には字数削減と文法的なチェックであった。Ｙの小論文は内容もよく書けており、文法的な間違いもほとんどなかったが、「だけど」「なので」というような口語的な表現を使っていたり、「〇〇と思う」という表現が何度も続いていたりしたため、論文にふさわしい言い回しやバリエーションについてアドバイスをした。日本人生徒であれば、国語の授業やこれまでの経験から論文はどのように書くかは大体把握できているであろう。そのため逆に、留学生は日常会話や授業の内容はわかっても、このようなことは知識として得にくいのではないか。このようなことも、補習のなかで補うことができればよいと思う。

第四に、宿題として出されたレポート課題に対する支援がある（28）。レポート課題は２回あり、ひとつは1938年にヒトラー・ユーゲントが来日し、附属高校にも来校したことをとりあげた授業のあとで、関連資料を読み、家族、友人、先生などと話し合って考えをまとめる課題、もうひとつはリストアップされた公開中の映画、またはビデオ映画の中から、１作品について考察する課題であった。

後者については、アドバイスを求められたが見たことのない作品が多く、具体的なアドバイスはできなかった。前者については、ＶとＹが私たちと話し合いたいということであったので、協力・助言という形をとった。この課題として求められていることは、第二次世界大戦開始直前の時代について、ドイツのみならず日本の状況も知っていなくてはならないものであったので、話し合う中でその解説も行った。ふたりとも「この時代の日本はどうであったのか」など、背景を知ろうとする姿勢が見られた。特にＹは、ヒトラーは現代では悪人ととらえられているが、当時のドイツ人にも日本人にも歓迎されていたという点に興味があるようだった。この補習では話し合うだけで、ポイントを整理したり、文章にす

るところまでは手伝うことはしなかったが、それを必要としないまでになったと考えてもよいのではないだろうか。

以上、試験対策や小論文・レポート課題対策について具体的に補習の内容を述べた。あらためて見てみると、試験対策では問題の理解度が上がり、課題対策では自分たちで考えまとめることができるようになった。特に小論文・レポート対策といった課題に関しては、その進歩が顕著である。最初の小論文ではテーマ探しから要点整理、日本語の文法などを細かく直すところまで、初歩から仕上げまで細かな支援をしたが、その後は簡単な文章校正や話し合いをするなかで意見を出したり、アドバイスをしたりという「協力・助言」のような関わり方に変化していった。このような私たちの関わり方の変化は、毎回留学生が試験や課題に真剣に取り組んでいった成果と考えてよいだろう。補習の方法としてはそれぞれの具体例の中で示したように、反省すべき点がある。留意点、反省点ともに、これからの補習に生かしていければと思う。

３．考　察

約１年間の補習を通じて最も印象に残っていることは、ＶとＹの勉強に対する意欲である。そのやる気、熱意には、非常に触発されるものがあり、私たちは彼女たちの意欲を大切にし、そのよりよい手助けとなればと思って補習を行ってきたつもりである。以下では補習を通して留学生にみられた変化、気づいたこと、考えたことを述べることで、留学生ＶとＹおよびその補習について考察していきたい。

(1)　補習を通じて感じた変化

まず、ＶとＹが補習を通して変化したと考える点として、４点ほど挙げておく。

第一には、補習中のタイ語での会話が減り、プリントに書き込むメモも最初はタイ語であったが、それも日本語になったことである。これは語学に関しての成長であると考えられる。このことで授業の板書もしっかりとなされ、プリントの空欄にも聞き取った内容がぎっしりと書かれるようになった。

第二に、第一を受けてのことでもあると思われるが、授業内容がわからないということが減った点が挙げられる。この補習の最初のころは、授業での内容が完全には理解できておらず、「最初からもう一度（授業内容を）説明してください」ということが多かったが、次第にそれは減っていった。内容についての説明は、授業のなかでの個々のトピックを理解した上で、それらの因果関係や関連性について確認するために行うようになった。

第三に、補習中に、自分から進んで資料集を見るようになったことが挙げられる。語句の意味などは、以前から電子辞書を使って自分でも調べていたが、説明を聞きながら自分で資料集の関連するページを探したり、地図でどこにあるのかを尋ねるようになった。

第四に、第一から第三までの影響もあり、質問の内容も変化した。当初はプリントでの分からない語句の意味などに関する質問が多かったが、次第に内容を理解したうえでの質問が多くなった。補習の中

での気づきや疑問は、より深い理解につながるものでもあるため、これからも大切にしていきたいと思う。

変化の具体的な例については本章１節において挙げたとおりである。

(2)　ＶとＹの歴史との向き合い方

次に、補習をしていて気づいた点を３点ほど挙げてみたい。

最初に挙げられるのが、タイとの比較の視点である。レポートの際のみならず、通常の授業の補習をする際にも、タイの制度と比較して考える傾向がある。例えば、「明治時代の日本とタイの国王制を比較することで、理解しやすくなった」と言っていた。他にも国会の仕組みに触れた際に、Ｖは「文章はわかっても、内容がわからない」と言っていたのだが、自らタイの国会の仕組みと比較することで、その違いに気づくことで理解へと向かったことがあった。

第二は、歴史上のできごとについて日本人としてどう思うか、と多く訊かれた点である。例えば戦時中の日本人の愛国心についてのみならず、「現在の日本人は日本、特に天皇制のことをどう思っているのか」、「戦前の教育についてどう考えるか」、「日本人として第一次世界大戦、第二次世界大戦をどうとらえるか」といった質問がなされた。このような質問がなされたのは、日本人が自国の歴史をどのようにとらえているのかについて、関心があったためかもしれない。

確かに、この補習はそのような留学生の疑問に答える場であったはずである。しかし補習を行う中で、ふたりとも日本人がどう思うかを気にしすぎるところがあるようにも感じられた。私たちはＶ、Ｙふたりの利点は、特に日本史の場合、日本の歴史を全くの第三者としてみることができる点にあるのではないかと考える。日本人がどう思うかと遠慮せずに、また日本人の考えをまるごと「正解」として受け入れるのではなく、自分の感じた疑問や違和感を大切に、タイ人としての意見を持てばよいと感じた。

現在の日本の社会情勢については、日本で生活している以上、第三者としては見ることは必ずしもできないが、過去の日本の歴史については、日本人としてではなく、また欧米や、アジアの植民地側からの視点でもなく見ることができる。そのような見方ができるのは、歴史を学ぶ上で歴史を客観的に見るという大きな利点につながると思う。日本人ではない分、日本の歴史を学ぶ中では、日本の行動パターン、心性の部分がわからず、気にかかることはよく理解できる。しかしそれにとらわれず、自分たちの利点とも言える部分をもう少し大事にするならば、もっと歴史を理解できるのではないかと思った。

第三は、歴史上の人物や制度に対する現代の評価と当時の評価や考え方との相違、その変化についての混乱、理解の難しさである。「現代の評価」と言っても、歴史学研究の成果や授業などよりも、テレビや映画、小説などマスメディアが造りだす歴史のイメージ、歴史認識の影響が強い。たとえばヒトラー・ユーゲントの来校をめぐる課題の時に、「ナチスは反ユダヤ思想を持ちひどいことをしていたのに、なぜ彼らは日本でこんなに歓迎されているのか」という質問があった。これはナチスやヒトラーに対する現在の否定的な評価に立った見方であり、当時の時代背景、日本とドイツの政治、社会、文化の状況、両

国の関係に気づいていないことから生じる疑問である。

こうした歴史のイメージや歴史認識の混乱は、一般生徒においても見られがちなことだろう。しかし現代の評価、印象が、当時の人々の見方と同じであると思い込んでしまうと、歴史を理解することはできない。そのできごとに至るまでの状況、時代背景、当時の人々の心性に留意して当時の文脈を探り、その文脈にそって捉えることで、初めて歴史を正しく理解し、自分自身で評価を与えることができる。こうしたことを気づかせていくことこそが、留学生にもまた一般生徒にも、歴史を学ぶ上で共に必要なことなのではないだろうか。

(3)　補習を終えて

この補習は、私たちにとって「質問することの大切さ」をあらためて知り、「わかるということ」について再考させられる契機にもなった。全体を通して見てみても、ＶとＹは留学生であり、当初は言語の点においてもわからないことがかなりあり、内容の上でも容易に理解できないものがあったことは確かである。

例えば、通常の補習に関して上述したように、授業その他で扱われた「社会主義」と「共産主義」などは、使われる文脈によって意味が少しずつ変化する。例えばサン・シモンのような初期社会主義とマルクス、エンゲルスの社会主義、ロシア革命の社会主義、ファシズム勢力と対抗した社会主義、そして中国の社会主義など、あり方に微妙な違いがある。このような文脈の中で異なる意味になる用語は、説明した私たちの力不足のせいもあり、ふたりともなかなか理解できなかった。その点は反省点であるが、彼女たちの良いところは、「わからないことは同じ事でも何度でも質問する」ことができる点である。

例に挙げた社会主義や共産主義にしても、日本人の生徒達にとっても難しくわからない部分なのではないかと思う。実際私たちが高校生であったときのことを振り返っても、「なんとなくわかる」というだけで、はっきりとさせないままにしてしまった記憶がある。恥ずかしいことだが補習をしていると、「そういえば何だっけ」「今まであまり気に留めていなかったが、どうしてだろう」と私たち自身、曖昧にしてしまっていた部分に気づかされることがある。同じように日本人の生徒も、留学生がわからない部分を「何となくこういうことなのではないか」というままにして、本当はわかってないかもしれない。その意味でも恥ずかしがらず、疑問に思ったことをすぐに質問にするＶとＹの姿勢は高く評価できる。そして同時に、質問の重要さを再認識することのできる補習でもあった。

また、当初は、母語でない授業のため、聞き取れない部分、わからない部分について補足・説明する場としての補習であったが、その目的は留学生自身の能力の伸長と要望により、内容が自然と変化していった。試験直前にかぎって言えば、練習問題を解くことに集中して単なる試験対策になってしまったのではないかと心配した面もあるが、それ以上にこの補習が疑問をすぐに解決できる場になっていればよいと思う。

また、授業で扱った内容をもう一度整理し、組み立てること、つまり再構成、比較することによって、

それまでは気づかなかった発見ができればよいと考える。例えばイタリア、ドイツ、日本と授業で個別に学習した部分を補習でまとめて復習することで、ファシズムを理解しやすくなり、それまで気づかなかった共通点にふたりの注意を向けることができた。またさらに時代を超えて、例えば独裁制という観点からフランス絶対王制とナチズムを比較してみるなど、個々の事件を補習では既習の部分と結びつけたり、比較したりといった試みができればよかったと考える。今後は単に授業の復習だけではなく、そこから発展できるようなものも視野に入れていく必要があるのではないだろうか。

つぎに補習の形式だが、補習は通常私たちふたりで行った。このことはこの補習に効果的であったと思う。担当者がふたりで補習を行ったことの利点として、次の４点が挙げられる。

第一に、時間のやりくりができたことである。高校の行事や定期考査の予定にあわせて、日程を変更しても、たいてい私たちのどちらかは都合がつけられ、補習を休みにすることがほとんどなかった。第二は、時間のロスが少なかったことである。ひとりが説明している間に、もう一方が用語集などで詳しく調べることもでき、スムーズな流れで補習が行えたと思う。第三には、小論文対策においてのことである。小論文では、ＶとＹそれぞれが異なるテーマについて書くので、同時にふたりを支援することはできない。しかし、私たちがふたりいたことで、ひとりを待たせずに、一対一で書いたものの見直しができた。また、ひとりに対して私たちふたりの意見が出せ、ＶやＹにとっても複数の意見を参考にできたのはよいことであったのではないだろうか。最後に第四は、ふたりで相談したり、足りないところを補いつつ協力して補習を進めることができた点である。補習をどのように進めるべきかについても、ふたりで相談することでよりよい方法をとることにつながったと思う。また解説の際にも、伝え方、事実の確認など、ひとりでは難しいこともでき、説明する側としてもやりやすかった。さらに、それぞれの持っている参考書が異なったことも、様々な資料の提示につながり、利用の幅が広がって理解を促すのに効果的であったと感じる。

このように私たちがふたりで補習を担当したことは、補習を受けたふたりにとっても、私たちにとっても多くの利点があったと考える。そのため補習は今後もできるだけ複数で担当することが望ましい、と考えている。

最後に、この補習は教える側にも非常にやりがいがあり、歴史についてあらためて考える有意義な機会となった。（佐々井真知、鯨井彩子）

タイ留学生補習記録

※　日本史や政治経済と記してある以外は、すべて世界史の授業や試験に関する補習

回	日　付	内　容	備　考
1	5月25日(木)	授業補足（沖縄戦）	V、Yの希望により木曜日に変更
2	31日(水)	授業補足（沖縄戦、クニ・国について）、小テストの復習	
3	6月7日(水)	授業補足、小論文（期末試験）の資料探し	資料探しには大学附属図書館を利用
4	14日(水)	小論文の論点整理	
5	21日(水)	小論文の構成・考察について検討	高校が登校禁止のため、大学内教室にて補習
6	27日(火)	小論文最終確認（文法など）、授業補足（日本史：明治維新）	試験の日程との関係で火曜日に変更
1学期期末試験（6月29日～7月4日）			
7	7月5日(水)	授業補足(アメリカ独立革命～西部開拓)	
8	12日(水)	授業補足（西部開拓～黒人奴隷貿易）	
9	19日(水)	小論文（夏休みの課題）のテーマ決めについて助言	
10	8月29日(火)	小論文（夏休みの課題）のテーマ検討、資料探し	夏休み中のため火曜日に変更、資料探しには附属図書館を利用した、Yとはその後メールを使って相談
11	9月13日(水)	授業補足（南北戦争～「金ぴかの時代」と海外進出）	
*	15日(金)	練習問題をコピー、次回までの宿題として渡す	社会科準備室の問題集から選択、コピー
	20日：文化祭の代休		
12	27日(水)	宿題(アメリカ独立革命～合衆国の拡大)答え合わせ・解説、授業補足（南北戦争後のアメリカ）、宿題指示	
*	10月2日(月)	練習問題をコピー	
13	4日(水)	宿題答え合わせ・解説、授業補足（南北戦争後のアメリカ、産業革命後のイギリス）	
14	6日(金)	試験対策（日本史：日清戦争後～ヴェルサイユ体制）	試験の日程との関係で金曜日に変更
15	12日(木)	試験対策（日本史：日清戦争後～ヴェルサイユ体制）	翌日が日本史の試験のため、追加
2学期中間試験（10月12日～17日）			
16	18日(水)	中間試験復習	
17	25日(水)	授業補足（帝国主義～第一次世界大戦開戦）	
18	11月1日(水)	授業補足（第一次世界大戦、特にパレスチナに関する問題）、練習問題を渡す	
19	8日(水)	宿題（社会主義・第一次世界大戦）答え合わせ・解説、授業補足（第一次世界大戦の戦況、第一インターナショナル）	実力テストのため16時から開始、Vのみ出席

回	日　付	内　容	備　考
20	15日(水)	宿題（社会主義・第一次世界大戦）答え合わせ・解説、授業補足（第一次世界大戦の戦況、第一インターナショナル）	Yのみ出席
21	22日(水)	授業補足（社会主義と共産主義、ロシア革命～スターリン時代）	
*	24日(金)	練習問題をコピー	
22	12月1日(金)	試験対策（重大(十大)ニュース検討)、授業補足（日本史：大戦景気～軍部台頭）	11月29日が創立記念日のため金曜日に変更
23	6日(水)	試験対策（日本史：満州事変～第二次世界大戦)、問題解説	
24	11日(月)	授業補足（アメリカ合衆国の繁栄と世界恐慌)、試験対策として問題解説（第一次世界大戦、ロシア革命）	試験の日程との関係で月曜日に変更
2学期期末試験（12月8日～13日）			
25	1月17日(水)	授業補足（ファシズム)、予習（ナチス、ヒトラー）	
26	23日(火)	センター試験挑戦、V：留学生試験対策の練習問題の質問回答、Y：会報に掲載予定の小論文の手直し	24日が学力テストのため、火曜日に変更
27	31日(水)	授業補足（ナチス、ヒトラー)、留学生試験やセンター試験の勉強方法について	
28	2月7日(水)	課題①（ヒトラーユーゲント来校時の資料について話し合う）に協力、助言・課題②（映画をみて考察する）について助言	
	14日：高校入試		
29	21日(水)	授業補足（辛亥革命～日中戦争開戦)、予習（日中戦争）	
30	28日(水)	授業時に配布された問題解説（ファシズム、辛亥革命～日中戦争)、練習問題配布	補習前に練習問題をコピー
31	3月7日(水)	試験対策（問題解説、ファシズム、辛亥革命～日中戦争）	
32	8日(木)	試験対策（日本史：問題解説、戦後改革～高度経済成長）	翌日が日本史の試験のため、追加
3学期期末試験（3月6日～9日）			
33	14日(水)	日本留学試験対策（世界史：帝国主義とアジア・アフリカの植民地化、政治経済：日本の国会・内閣の仕組み）	Vのみ出席
34	20日(火)	日本留学試験対策（政治経済：日本の国会・内閣の仕組み、政党政治、選挙制度、地方自治）	Vのみ出席
35	22日(木)	日本留学試験対策(政治経済：各国の政治制度、グローバリゼーションと地域統合)	Vのみ出席
36	23日(金)	日本留学試験対策（政治経済：国際連合、南北問題）	Vのみ出席

Ⅲ章　評価と考察

Ⅱ章で見たとおり、留学生と補習担当者４名の恵まれた能力と熱意によって、充実した学習支援が行われた。ＶとＹは通常の試験だけでなく小論文やレポートにおいても平均点以上をとり、後者ではトップクラスの評価も度々得た。以下授業、試験、小論文・レポートについて具体的に取りあげ、最後にＶ、Ｙへのインタヴューを報告する。

１．授　　業

授業時間中、ふたりを外国人や留学生として特別に意識することはほとんどなかった。社会科教室にも遅刻をせず早めに移動してくるので、授業前にことばを交わす機会も多かった。授業中に寝ることもなく、常にまじめな態度であった。Ｖは積極的に私に話しかけ、「戦争のことをもっと知りたいので、何か良い日本語の小説や映画はないか」という質問もした。社会科教室の本を貸し、いくつかの作品を紹介したが、Ｖが日本の本をよく読み、映画もよく観ていることは補習からも伝わった。

２．試　　験

試験は、語句や年号などを答える問いと、考えて自分で文章を書いて答える問いから成り、50分の試験では皆必死に書かなければ間に合わない分量である。留学生はいくつもの問題文を読み、日本語で書いて答えなければならないが、ＶとＹは試験で平均点以上を取ることができた。

この背景には、補習で練習問題を行ったことの力が大きいと思われる。誤答には「グラード（ペトログラード)」「ローマ進行（ローマ進軍)」「選挙法（選挙)」など、ことばの表記を原因とする惜しいものもあるが、採点にあたっては留学生だからと特別の配慮はせず、ダブルスタンダードにはしなかった。それどころか、ふたりは一般生徒も難しく感じる下記のような大学入試レベルの応用問題で、しばしば模範解答となる良質の解答を出し、理解の深さを示した。

・アメリカの東部13植民地が独立戦争の結果勝ち取った「独立」と対比して、その後の「西部」の成立こそがヨーロッパからの真の独立であったとする考え方がある。それはどのような意味でそう言えるのか、「東部」と「西部」の差異に留意して、簡潔に説明せよ。

・世界革命論がむしろ低開発国に大きな影響を及ぼしたのはなぜか。なぜそれらの国々ではその変革が先進国以上に求められたのか。２点あげよ。

また、２学期期末試験の「重大（十大）ニュース」は予告問題であり、準備をしておけば確実に得点を稼げる問題である。しかしＶが10件すべてを準備して得点を挙げたのに対し、Ｙは４件の記述のみ、しかも不十分な内容のためここでの得点は低かった。これはニュースを調べて準備することに対する、ふたりの気質の違い、あるいは科目の優先度の違いの現われかもしれない。

Ⅱ章で地図を使った学習について触れられていたが、地図を用いた問題は比較的難しかったようだ。これも練習問題をして慣れておけば、違う結果が出たかもしれない。

いずれにしろ時間の制限のある試験では、「わかるようになったけれど、日本語で書くことには時間がかかる」と言うふたりには大きなハンディがあり、知識や理解が答案に正解を書くことにはすぐつながらないことを踏まえておきたい。

3．小論文・レポート

この種の課題は1年の間①1学期期末試験の小論文（6月）、②夏休みの課題（小論文）、③冬休みの課題（小論文）④1938年のヒトラー・ユーゲントの来校に関連して考察する課題（2月）、⑤映画を観て考察する課題（2月）と5回あった。そのうち②夏休みの課題と③冬休みの課題は自由提出である。三分の一強の生徒が夏休みの課題を提出し、あるいは両方提出する者も、また全くどちらも提出しない者もいる。Vは夏休みの課題を提出したが、期限に間に合わなかったYはテーマをドイツから朝鮮民主主義人民共和国に変え、正月明けに冬休みの課題を提出した。通常の試験で記述式の説明や考察を求める問題に優れた解答を出したように、これらの課題における優秀さは目を引くものがあった。Ⅱ章2節（2）に示されたように、補習担当者による支援は1学期の期末試験のみで、以後はYとVそれぞれ本人の自力による成果である。以下の引用は原文のまま、わずかに見られた誤字のみ書き改めた。

(1)　1学期期末試験（6月）の小論文から

「愛国心はどうつくられるのか　―タイの華人の場合」　V

フランス政府は、フランス語による国家統一させようとして、アルザスの人々もフランス語をすばらしく愛すべき国語と思っているような小説を書いた。それによって、フランスの愛国心を押しつけようとした。そこで、私は愛国心が何でつくられるのかということに興味を持った。

私の父の父と、母の両親は、三人ともよりいい生活を求め船で中国からタイへ移住した。そして、父と母がタイで生まれ、孫である私もタイで生まれた。私は中国人の血が流れていながら、タイ王国を愛している。そこで、私の華人の愛国心について調べた。

現在、タイの人口の約10%が中国の人で800万人もいるそうだ。古くから、中国人商人がタイに渡っていた。その時、中国文化である焼き物技術を持ち込んだ。18世紀に入り、潮州出身の父とタイ人の母を持つ「タークシン」が王に就くと、潮州を中心に華人がタイ国内に流れ込んだ。20世紀には、中国の不安定な政治のため、タイへの移民が増加した。

その後、タイにおける華人の同化が進んだ。現在、タイ人の華人の対立もなく、うまく共存している。その主な理由は三つあると思う。一つ目は、中国人が自分の意志でタイに来たということである。当時の中国の政治状勢が不安定なため、外国に来た中国人が郷土（中国）に帰れず、本国とのつながりがだんだん薄れていった。二つ目は、昔から中国人がタイに渡っており、タイ文化と中国文化が似ているので、タイ人が中国人に親しみを感じやすかったからだろう。だから、多くの中国人の移民は、タイ人にとって受け入れやすかった。最後に、もっとも重要な原因はタイ政府による「同化政策」で

ある。当初のタイの華人は華人文化にこだわり、タイ社会へ同化しようとしなかった。そこで、タイ政府が中国の文化を認めながら、タイで生まれた華人に自動的にタイ国籍を与えた。華人を外国人ではなくタイ国民として扱った。このような緩やかな政策により、華人がタイの学校に行きタイ人と結婚するようになった。以上の三つの理由のバランスによって、華人が徐々に同化した。

同化したとはいえ、世代ごとにどこに愛国心を感じるかは異なる。そこで、私は家族のみんなに聞いた。１世の祖母は、もちろん郷土中国を愛しているという。２世の母父は、両親のために中国語を話すし、中国の行事を行う。でも、本心はタイで生まれ育ったため、タイへの愛国心の方が強いそうだ。そして、３世の私もタイで生まれ育った。さらに、両親が中国の文化を私に伝えようともしなかったし、中国さえ行ったことがなく、中国を外国のように感じている。そのため、私は100％タイ国民として意識していて、タイだけの愛国心を持っている。このように、世代が進みにつれて、（タイ華人の）中国に対する愛国心が薄れていく。

つまり、愛国心は血縁より、周りの環境によって影響されると思う。しかし環境といっても、タイのように差別がない緩やかな政策か、アルザス人に対するフランスの強制的な政策かで、本当に愛国心が育つかが異なる。ちがう民族と平和に共存するためには、受け入れる心が必要である。そして、少数民族の愛国心は、上から押しつけられるのではなく、自然の情で、自分から思うものではないと生まれないのではないか。

(2)　冬休みの課題（小論文）

「北朝鮮の見方」　Y

北朝鮮がミサイル発射につづいて、核実験を実施したことで、全国の朝鮮学校に脅迫や嫌がらせ電話などの被害が相次いだ。在日朝鮮人の子供たちにはなんの罪もないのに、なぜそんな被害にあわなければいけないのか、私はとても理不尽だと感じて、調べてみた。

北朝鮮は指導者金正日による独裁政治の社会主義国家で、ブッシュ大統領が呼んだ「悪の枢軸」三カ国中の一つである。『ならず者国家』（ジャスパー・ベッカー著、草思社）によれば、北朝鮮は兵器の大量保有、世界のゲリラ組織への武器の提供、外国人拉致、麻薬取引をして外国紙幣偽造もしている。金正日一族は「宮廷」生活を享受する一方、飢餓による死亡者は三百万人にも及ぶ。旅行の禁止、言論統制など、国民の人権は常に侵害され、そのような国民の苦しい生活も難民問題につながっている。

しかし、こうした北朝鮮の国家体制とその国民は同じものなのだろうか。先日、私はテレビでベトナム戦争で使用された枯れ葉剤の影響とみられる結合双生児の一人のドクさんのインタヴューを見た。ドクさんは「枯れ葉剤を使用したのはアメリカ人ではなくて、アメリカ政府だ」と言っていた。私はドクさんの言葉にうなずいていた。

国際社会や私たちには、北朝鮮は恐ろしい国に見えるだろう。だが、北朝鮮が恐ろしい国だからと

いって、その国民みんなが犯罪者ではない。個人が存在しているからこそ、国家が成り立つ。だから、国家は個人のためにあるべきだ。しかし、北朝鮮の場合は違う。北朝鮮の国家体制から考えると、北朝鮮の国民個人が北朝鮮である国家のためにあるようなものだ。そのため、核実験などは北朝鮮国家の行ったことであって、北朝鮮の国民に罪はないと思う。

日本で起きた朝鮮学校への嫌がらせや朝鮮人に対する差別の原因は、その人々の国家と個人とのとらえ方が間違っているからではないか。『国家と個人』（田中浩著、岩波書店）によると、戦前の日本は明治維新以来、列強の一員になることを目標に富国強兵政策をとり、国民は国家利益を最優先させるような教育や政治指導を受けてきた。私はこの考え方はまだ日本人の中に根強く残っていると思う。現代の日本人は戦前のような日本国民であることをあまり自覚していないだろうが、外国人に対してはまだ戦前の考え方を持ち、国家として個人をとらえてしまうことが多いと思う。またメディアも「北朝鮮が～を行った」などと、よく国家と個人をひとつのものとして扱ってしまう。だから、私たちも勘違いしやすいのだろう。さらに、「～だから、～だ」というイメージや先入観が私たちの中にあると思う。しかし、その先入観だけで人の人格などを勝手に決めつけてはいけないだろう。

グローバル化している現代の国際社会には、国家と個人とを一つのものとして扱う場合と別々のものとして扱う場合があるだろう。この国家と個人の区別をもっと意識することで、日本人の北朝鮮に対する反感や中国人の反日感情などを正しくとらえるのではないか。よりよい国際社会を築くこともできるだろう。

(3) 映画を観て考察する課題（２月）

「『戦場のアリア』を観て！」　Y

まず、驚いたことは連合軍の塹壕からドイツ軍がいる塹壕までの距離があまりにも近かったことだ。映画の中だと100メートル程度のものだったので、いつ敵兵に撃たれて死ぬかも分からないし、ミスも許されない、気のぬけない状況の中に戦っていた兵士たちのことを思うとぞっとした。戦争の恐ろしさを感じた。

次に、印象に残ったのは、この映画の最大のポイントとも言える両軍が音楽というものに通じて、お互いに心を開き、和解し停戦したシーンだった。戦場にいた両軍の兵士たちは戦争に疲れきっていて、家でクリスマスを過ごせないことを悔やんでいたちょうどその時に、音楽が兵士たちの心を癒して、両軍の兵士の心を動かしたのだと思う。国や民族や言葉が違っていても、音楽というものは通じ合える。歌詞がフランス語であったり、ドイツ語であったりしても、特に有名な曲、メロディーを聞くだけで、人はその音楽を一緒に楽しむことができる。音楽祭とかでも、言葉が通じなくても、外国人と同じ曲を演奏したりできる。音楽は世界共通なんだなあと思ったし、音楽の不思議な力にも気づくことができた。

イブの夜を共に過ごした両軍が助け合う姿がとても感動的だった。死者を葬るのを手伝いあったり、

自分たちの国の兵隊が敵兵を砲撃するなどと忠告して、自分たちの塹壕に敵兵を隠してあげたりする姿も見ていて、連合軍の兵士とドイツ軍の兵士、彼らはもう敵兵同士ではなくて、まさに人間同士の姿だったと思う。両軍の兵士たちが友好関係を築いたのは戦場の中で（戦争が起きなければ彼らは出会っていなかったかもしれないし、友達にもなれなかった）だが、けっして戦争というものを通してではなくて、音楽やスポーツでいい関係をつくっていった。戦争で平和な世界をつくることは絶対にできない。

やがて、兵士たちが書いた手紙を盗み読み、司令部の人たちが自分の兵隊と敵兵の交流のことを知り、激怒した。国家反逆罪だといって、隊を解散させ、他のところの前線に送られた。最後のシーンで司令部の人が兵士たちを他のところの前線に送り出すところ、ハーモニカを見つけ「ハーモニカなど必要ない」と言って、踏み壊した後、兵士たちがみんなで歌をハモっていた。このシーンもとても印象的だった。表には抵抗することができないけれども、兵士たちは心の中で敵軍との交流を恥と思っていないし、後悔していないという思いが伝わっていて、兵士たちの強い意志を感じた。映画の中に、「敵兵を殺せという司令部の人たちより、敵兵の方が人間らしい」という台詞があった。私はとても共感できる言葉だと思った。「国が起こした戦争に国のために戦うが、国は我々の苦しみもつらさもわかってくれない。」戦争をしたくないのに、戦争を起こした国の人々の立場はとてもかわいそうだ。

ここで、キリスト教に注目して、この映画を考えてみたいと思う。フランス軍、ドイツ軍、スコットランド軍の兵士のほとんどがキリスト教であったから、クリスマスに意味があったと思う。日本では、クリスマスはただクリスマスツリーやサンタの人形があっちこっちに飾ったり、ケーキを食べたり、恋人同士のイベントだ。しかし、この映画を通して、私はクリスマスはもっと意味のあるイベントだということを改めて実感した。第一次世界大戦中にもかかわらず、戦場にクリスマスツリーを10万本も送るくらいだから、ヨーロッパの人々にとってはよほど大事なイベントではないとできないと思う。クリスマスはヨーロッパの人々にとって、ただ宗教の大事な日だけではなくて、家で家族と過ごす日だそうだ。（ガイレ・ユリエちゃん[6]によれば、今のドイツでも、クリスマスは１年中の一番大きなお祭りだそうです。）クリスマスの日は両軍の兵士は家族のことを思い出し、戦いたくない気持ちがこの日に強くあって、だからクリスマスがキッカケになって、両軍が和解できた。両軍がキリスト教徒であってよかったところだ。

一方で、キリスト教は悪い方向にも利用されていた。司教が新兵たちに言った言葉に、「主（キリスト）は平和をもたらすためではなくて、剣を与えるために来た」とある。『マタイ書第10章』によるものだそうだ。そして、戦争は文明を守るための手段であって、神の戦いで聖戦であるとも言っていた。この戦争は悪の軍隊を殺すための戦争で、いわゆる、授業で習ったアメリカ白人の「明白な運命」というものだ。私は司教がうまくキリスト教を利用して、新兵たちを自分たち（司令部の人たち）のいいなりにするための道具だと思った。キリスト教自体は悪いものではない。どの宗教も人の心の支えであると思う。しかし宗教の力を利用して、人間を動かすこともできることを忘れてはいけない。

また、この映画の設定はヨーロッパ特有のものだとすごく感じられた。（実際の戦場がヨーロッパでしかたのないことなのかもしれないが！）ほとんどの兵士がキリスト教徒だったので、クリスマスには特別な思いがあったし、家族に会いたいという思いも共通であった。それに、ドイツ軍もフランス軍やスコットランド軍もヨーロッパの国の軍で、ヨーロッパでは文化の交流も盛んで、同じような傾向の音楽や曲を知っていた。そして、ヨーロッパに住んでいる人たちだから英語にはなじみがある。みんながみんな英語が話せるというわけではないと思うが、映画の中では、停戦の話が英語で行われていた。三つの条件（キリスト教、同じ曲（音楽）、英語）どれかがなければ、この物語はどうなっていただろう。もしこの戦争がキリスト教徒とイスラム教徒の間で起こっていたら、クリスマスという和解の機会もなかっただろうし、映画の中のようなちょうど同じ曲を知っていることはまれなことではないだろうか。そして、もしも、この戦争がアジアの国の人と白人の間の戦争だったり、であれば、心を通じ合えただろうか。映画の中のように話しがうまく運ばなかっただろうと思う。私はやっぱりヨーロッパの人の中にはなにか共通する部分があるから、こんな感動するような話が生まれたと思う。

他にも、この映画の中には家族愛、兄弟愛、も美しく描かれている。兵士たちは私たちと変わらないごく普通の人々だったが、兵士になったら、人間を殺さなければいけなくなるし、自分がいつ死ぬか分からない状況に置かれる。兵士たちの精神状態は悪かっただろう。歌手だったニコラウスも兵士になって、暇つぶしでタバコを吸うようになった。歌手だったら、タバコは禁物のはずなのに、戦場のニコラウスもストレスがたまって、タバコに手を出してしまっただろう。戦争はいい人を悪い人に変えてしまうほど、残酷で、恐ろしいものだ。だが、兵士たちが戦争を戦い続ける理由があった。みんな家族を思って戦い、家族にもう一度会いたいがために生きぬこうとする。家族が心の支えになって、戦争を乗り越える。私たちが普段あまり意識していない家族や兄弟の大切さを教えてくれた。

皇太子殿下が、ニコラウスが自分で兵士になろうと志願したと勘違いしていたシーンも、殿下には本当のことが伝えられなかったか、あるいは身分が高い人はあまり事の実態をつかんでいない様子がよく分かる。

(1)はVが、(2)(3)はYが書いたものある。１学期に近代国家の成立について学習した際、近代化や中央集権化によって得られるプラスとマイナス、「クニ」とは何なのかを考えるヒントを提示した。

(1)でVは、タイの第３世代の華人である自分自身の歴史についての学習を踏まえて、考察した。内容にはまだ不十分な点もあるが、このテーマを「発見」、設定したことからVが授業内容を理解したこと、また日本語の文献を読み、日本語でまとめる力も優れていることがわかる。

(2)でYは、北朝鮮のミサイル発射に関連する日本人の北朝鮮バッシングや在日朝鮮人への嫌がらせについて、枯葉剤の被害者であるヴェトナム青年ドクのことばもしっかり本意を受けとめて、自らの考えをまとめた。国家と個人をどうとらえるかという問題は、近現代史の重要なテーマのひとつである。日本で暮して３年が過ぎ、様々な学習や体験を通じて日本社会に対する認識が形成されたこと、またそれ

をきちんと日本語で表現できることがわかる。ともに学ぶ生徒たちの視野を開く論稿である。

Ｙは惜しまず長文を書いて提出したが、(3)の課題も2,900字におよんだ。Ｙが課題のリストから選んだ映画は『戦場のアリア』（2005年製作、監督クリスチャン・カリオン、フランス・ドイツ・イギリス合作）で、ＤＶＤによる鑑賞である。舞台は1914年、第一次世界大戦下最初に迎えた冬のフランス北部戦線。フランス・スコットランド連合軍とドイツ軍が連日熾烈な戦いを繰り広げていた中、クリスマスイヴにドイツ軍陣営から聞えた歌声を機に、スコットランド軍のバグパイプの伴奏が始まり、３カ国の軍は一夜限りの停戦に応じ、ともにクリスマスを仲良く祝う。戦場で、敵味方を越えた兵士の友好の交歓が起きた、夢のような実話の映画化である。

最初の「現代的な戦争」である第一次世界大戦が予想外に長期化し、様々な新兵器の開発もあって大量殺戮の場となったことは２学期に学習し、記録映像もビデオで視聴した。Ｙは各国兵士の心を結んだ音楽の力に注目したあと、兵士の交歓を知った軍上層部が彼らを国家反逆罪として厳しく罰したことに対し、兵士の方が人間的であること、彼らが交歓を後悔していないことを印象的に記している。

さらにキリスト教にも注目し、クラスメートであったドイツ人留学生のことばから、キリスト教徒にとってのクリスマスの重要性を思い起こし、さらに当時戦争にキリスト教会が果たした役割も見逃さない。アメリカ史で学習した「明白な運命（マニフェスト・デスティニー）」の概念もきちんとつかんでいる。宗教が政治的に利用され得ることをとらえた上で、「キリスト教自体は悪いものではない。どの宗教も人の心の支えであると思う。しかし宗教の力を利用して、人間を動かすこともできることを忘れてはいけない」として、(2)の『北朝鮮の見方』で示した「国家と個人の区別をもっと意識すること」と通じる考えを示している。

さらに「もしこの戦争がキリスト教徒とイスラム教徒の間で起こっていたら」「もしも、この戦争がアジアの国の人と白人の間の戦争だったり、であれば、心を通じ合えただろうか」、とキリスト教徒ではなくアジア人である自分の足元を見ることを忘れない。この点はとても重要である。授業その他で映画作品について生徒と意見を交換する機会を度々持つが、生徒が自分から作品のメッセージを自分自身や若い世代、日本（人）の問題としてとらえなおし、そのメッセージを読もうとすることはあまりない。自分は第三者で他人事や映画の中のできごととしてのみとらえがちである。Ｙはアジア人としてのアイデンティ、スタンスを正確に持ちながら、作品に没入しきらず、単なる感動に終わらせていない。

最後の家族愛、兄弟愛について、オペラ歌手が兵士となって喫煙するようになったこと、またドイツ皇太子の描写についてもよく観察と理解がゆきとどいている。

以上紙面の都合上３本のみの紹介だが、この１年の時間の経過につれ、ＹとＶが単に高校２年生として標準以上の日本語の語彙を使用し、漢字を用いて表記する力を持つだけではなく、授業その他の学習や社会体験などを踏まえ、優れた思考力、理解力、表現力を育てていることがわかる。

４．インタヴュー

2007年３月、１年間の授業と試験が終了した終業式も間近のある日、ＶとＹそれぞれ個別にインタヴ

ューを行った。この時点で、本人たちが授業や補習をどのようにとらえているかを知るためである。話題は他の教科や学習全般についても及んだ。

(1) Vへのインタヴューから

- 高校入学前に中学校の歴史の教科書を日本史の玉谷先生と勉強し、専門用語を知ることができました。とても役に立ちました。古代のことはよくわかりませんが、18世紀以降の日本史のイメージはわかるようになりました。今年の世界史と日本史は、補習がなければとても大変だったと思います。
- ２年生になって世界史と古文の補習を受けています。古文は難しくありません。文法はわかるし、文を暗記すれば大丈夫です。ただ登場人物の心理がわかりません。理科は難しいです。日本語の能力の問題ではなくて。国語の発表など、この高校独自の授業が楽しいです。
- 世界史と日本史の勉強は、自分の中ではがんばっている方だと思います。授業のあった日は必ず毎日家で復習します。補習で問題集からコピーしてもらった問題を解くこともあります。他の科目も復習が中心です。土曜、日曜は３時間以上勉強にあてています。
- 試験では流れやことばを覚えたのに、答え方がわからないのが残念です。質問の意味を間違えてしまいます。書きことばで答える（記述式の）問題が難しいです。「アメリカの資本投下」と答えるところを、「資本の統合」と書いてバツになってしまいました。「60字で」などと字数制限があると難しいです。
- タイの歴史の授業はここでの勉強とは、全然違います。タイでは生徒の考えを先生が聞くことはありません。ここでは先生が考えを言い、生徒の意見も聞いて歴史をおもしろくしてくれました。歴史の印象が変わりました。日本史では、なぜ今自民党の内閣なのかとか、日本の平和主義について知ることができ、現代の日本についてよくわかるようになりました。
- 補習は３年生になっても受けられるのでしょうか。ぜひ補習を続けてほしいです。６月の留学生験では、経済学を志望するため総合科目（地理歴史科、公民科）を受験します。きちんと準備をしなければなりません。

(2) Yへのインタヴューから

- 高校入学前の日本での勉強は、あまり今ほどちゃんとしなかったと思います。日本語の勉強にはなりました。
- １年生の時は地理も化学もわかりませんでした。もし世界史や日本史が１年の時だったら、わからなかったと思います。
- 難しいのは、中学で勉強してきていることが皆と違うので、わからないことがあることです。日本史で「中学でやったよね」と言われると皆はわかっているけれど、私はわからない。人の名前が難しいし、漢字の読みも難しいです。

・１学期のころはどの科目も難しかったです。耳で聞いても日本語の内容がわからなかったので。１年生のころはクラスでも皆が何を言っているのかわからなかったです。今はずいぶん違います。

・世界史も他の科目も、どれも同じくらいの力を入れています。テスト前以外は、ふだんは特に勉強しません。授業を聞いていればだいたいわかります。部活（中国武術部と箏曲部）がなかったら、毎日放課後何をして過ごせばよいのかと思います。

・世界史の補習では、授業中にわからないところに印をつけておいて、補習で聞くことにしています。

・テストに出るところは教科書を読めばわかるんじゃないですか？　日本史と世界史はちゃんと聞いて入れば大丈夫。だから寝ません。

・日本史、世界史は好きです。古代はおもしろくないけれど、近代のことをやるのでおもしろい。日本史はすべてが勉強になります。

・数学は中学（タイで）まではよくできました。古文と漢文はテストに出るところが決まっているので、そこを覚えていきます。

・タイではレポートは調べるだけ、本を写すだけです。１年生の時に現代社会の授業で「感想を書きなさい」と言われ、初めてのことだったので困りました。でもそれから何回もいろいろなところで書かされ、慣れてきました。

５．まとめ

以上１から３によって、今年度初めての試み、授業に遅れて５月末からの開始という条件のもとで、この補習が十分な成果をあげたことがわかる。要因はそもそもＶとＹの強い希望から始まったことに示されるように、一貫して本人たちが熱心に学習に取り組み、それを補習担当者が試行錯誤しつつチームワーク良く、様々な方法で有効に支援しつづけたことによる。毎週水曜日の補習が終わる５時半過ぎ、佐々井さん、鯨井さんは私にその日の簡単な報告をし、指導方法や教材に迷うことがあれば質問した。また別の時間に来校し、前もって社会科準備室で教材の準備にあたることも度々であった。希望により日本史の補習も行われたことで、世界史と日本史それぞれの理解も助けられた。今後条件は様々に異なるだろうが、モデルとなる補習を創ることができたと考えている。

開始時の補習の目的は、「日本語能力の不足や日本での社会体験の欠如、また日本の小中学校の社会科教育、歴史教育を受けていないために起きると考えられる通常の授業の理解不足を補うこと、言い換えれば標準的な日本人生徒程度の理解と学習の成果を挙げるための学習支援（Ｉ章２節)」であった。しかしそれは「また、当初は、母語でない授業のため、聞き取れない部分、わからない部分について補足・説明する場としての補習であったが、その目的は留学生自身の能力の伸長と要望により、内容が自然と変化していった」（Ⅱ章３節(3)）とあるように、単に外国人であるための理解不足を埋めるだけではなく、歴史や社会に対する知識、理解を得たうえで、ＶとＹ自らの歴史認識を育てるものとなっていった。

これは「わかるとは何か」、「歴史を学ぶとは何か」ということの本質を示す変化である。理解不足を

埋め、きちんと理解することと、生徒がそれぞれ自らの歴史認識を形成することの関係は、基本に対する応用・発展というように段階を踏むものではなく、相互関係にあって分かち得ないものである。授業との関連で言えば、わからないならばわからないなりの、授業を聞かずに寝ていればそれなりの、興味を持って学習すればまたそれなりの、歴史認識が形成される。知識、理解が不足していれば歴史認識は未熟なものになるが、「○○さんには歴史認識がない、ゼロである」ということにはなり得ない。

これまでこの考えのもとに授業してきたつもりだったが、ＹとＶへの補習開始にあたっては、その目的を外国人留学生が無事進級できるよう、授業の理解不足を補うことに設定した。語学のハンディのある外国人留学生に対しては、不覚にも知識、理解の獲得と歴史認識の形成とを切り離して考え、歴史認識の形成についてはあまり問わない姿勢でいたのである。これは大きなまちがいであった。この点に気づくことができ、幸いである。

Ⅱ章３節(3)では先の引用に続けて「試験直前にかぎって言えば、練習問題を解くことに集中して単なる試験対策になってしまったのではないかと心配した面もある」と記されているが、この点で私の感覚は少し異なる。国費留学生として学んでいる以上、良い成績をとらなければならないプレッシャーは相当なもののはずである。Ｖはこの１月理系から経済学に志望を変更したが、Ｙは理系志望である。専攻や試験を重視するならば他の科目にも力を割き、全体の科目の成績を上げなければならないだろう。しかし試験答案や課題を見るかぎり、おそらく大きな負担でありながら、ふたりはまじめに取り組み、優れた成果をあげている。

授業者として何よりも嬉しいのは、ＹとＶがこの科目で単に高得点をあげるために補習を望み、勉強したのではないこと、そしてふたりの「知りたい」「わかりたい」いう意欲が、歴史の知識に加えて歴史や社会を考察する力を育て、今日の世界や日本、タイ人としての自分のあり方、生き方を考えることにつながっていったことである。

この２月３年次の選択科目を決める時点で、文系のＶは世界史の選択を希望した。そして理系のＹも、世界史の選択を希望した。３年生が受験[7]や自分の志望とは「関係がない」科目を選択することは珍しい。理由は、Ｙが言うには「もっと世界や日本のことを知らなければならないと思うから」である。Ｖは歴史や社会に関して話し合いや個人発表を行う別の少人数の授業も望み、選択している。そして大使館はＶ、Ｙの希望に応え、費用を負担して３年次も世界史の補習を継続することを認めた。07年度は２年次に第２期の留学生２名、３年次にＹとＶが世界史を受講し、それぞれの補習で学習支援が行われる。新しい展開が楽しみである。（石出みどり）

Ⅳ章　おわりに

最後に一般生徒の歴史学習との関連について、一言触れたい。ＶとＹは毎週２時間の補習によって、授業の復習や課題の準備、試験のための練習問題を家庭教師のように支援されている。しかし一般生徒の大半は、ふだんは授業をその時間に聞くだけで、試験前にまとめて学習する方法をとっていると思わ

れる。こうした学習法自体は格別最近のものでもないが、受講する生徒の学力が以前とは変化してきている。

小学校低学年への生活科の導入（1992年度）以降小中学校での社会科の時間が減り、あわせて地理でも歴史でも世界（史）に関する学習の機会が激減したことから、高校での歴史学習は以前に比べ成果を挙げにくくなっている。それは小中学校で学んでいる日本史にも言えることで、世界各国や首都、都道府県の名称、所在地もあやしく、かつて誰でも知っていたはずの「常識」が今では常識でなくなっている部分が大きい。大げさに言えば、高校入学時の社会科的な知識は外国人留学生と一般生徒にあまり大きな違いはないのかもしれない。

今回の補習では、毎週定期的に支援者とノート代わりの授業プリントを復習し、歴史用語や制度、思想に関する難しい用語、資料プリントや資料集、地図の確認や読解、自由な質疑応答、さらに教科書や問題文を声を出して確認しながら読み、様々なタイプの練習問題を解いた。また６月の初めての小論文作成では、テーマの決め方や図書館、インターネットでの資料の探し方、基本的知識の確認、論点の整理が行われた。生徒２名に対し補習担当者２名の、丁寧で綿密な支援である。

手取り足取りと言えるが、補習の支援を間近にし、またＹとＶが着実に学力をつけていくのを見ていて、実はこのような支援は一般生徒に必要なのではないかと強く感じた。それには何よりも生徒自身に学習意欲がなければならず、また一方にはそのような少人数の綿密な指導を行いえない事情もある。それでも、一般生徒に「家庭教師のような手取り足取りの指導」ができるなら、潜んでいる力をどれだけ伸ばすことができるだろうかと思うのである。

大学生、大学院生と１年間に渡り、協同で生徒の学習支援にあたるという経験は初めてのことであった。協同と言ってもアドバイスを求められないかぎり支援は佐々井さん、鯨井さんに任せており、試験対策や小論文・レポート対策も一般生徒の疑問に応える範囲以上は関与せず、Ｙ、Ｖの求めに応じてふたりが適切と考える方法で公正に支援された。教育実習の学生と教員の関係と比べると、佐々井さん、鯨井さんはかなり自立的に支援した。そしてそのためには世界史の授業の見学や時間外の補習の準備も厭わず、単なるアルバイトどころではない熱心であたたかい支援を行った。

この原稿の執筆にあたり、３月半ばから３人で補習をふりかえって話し合い、各自の原稿をつき合わせて検討する作業を春休みに集中して行った。若い学生さんと意見を交換し考えをまとめるのは、補習のあとに残されていた予想外の刺激的で楽しい作業であった。留学生の補習をふりかえることで、一般生徒の歴史学習について考えられたことも、大切な収穫である。（石出みどり）

注

1)　１学年の定員120名のほかに、当該学生を最大２名まで受け入れる。

2)　ＹとＶに先立ち1999年に入学、2002年３月に卒業したタイ王国留学生が１名いる。この時の受け入れは臨時的なものであった。

3)　本校のカリキュラムでは必修科目として、１年次に地理Ａ、公民科の現代社会、２年次に世界史Ａ、日本史Ａ各２単位が置かれている。

4)　１名募集のところに２名の応募者を得、大使館が負担する１名分の費用で、この２名が支援を引き受けてくれることになった。

5)　日本の大学（学部）等に入学を希望する外国人留学生を対象とする、共通の入学試験。センター試験のようなマークシート方式で、2002年から実施されている。出題科目は日本語、理科（物理・化学・生物)、総合科目（政治・経済・現代社会・地理・近代の歴史の融合問題）及び数学で、大学が受験科目を指定する。

6)　１学期にＹのクラスに滞在したドイツの留学生。お母さんは日本人。ドイツの戦争責任についての考えなど、生徒に大きな印象を残した。

7)　ＹとＶの大学入学は一般の入学試験と異なり、日本留学試験その他によって決定される。

１階教官コンピューター室で